

松岡敬（同志社大学学長）【佐藤優の頂上対決／我々はどう生き残るか】

「週刊新潮」2020年2月13日号 掲載

「デイリー新潮」で2/18(火) 5:55 配信

同志社大学東京オフィスにて

大学はいま改革の只中にある。来年度の大学入試改革は先送りされたが、少子化の中、国公立大学を中心に再編統合が進められ、一方、私学は躍起になって独自色を出そうとしている。関西の名門・同志社大学は、他大学に先駆けて数々の改革を進めてきた。彼らが目指すのはどんな大学か。

佐藤 来月いっぱい、学長としての任期を終えられますね。たいへんお疲れ様でした。この4年間、松岡学長は様々な仕組みを次々と導入され、同志社大学を大きく変えてこられました。

松岡 OBの佐藤さんにも特別顧問になっていただき、いろいろとお手伝いしていただいた。ありがとうございます。

佐藤 以前から自身が学んだ神学部では教えていましたが、大学の中がちょっとガタガタしていると思っていたんです。そこに松岡学長が出てこられた。

松岡 そうでしたか。

佐藤 今回は改めて、松岡学長がなぜ今、大学改革をやらねばならなかったのか、その動機からうかがいたいと思います。

松岡 平成の30年間で私が強く感じたのは、大学に入ってくる若者たちに将来の夢がちゃんとあるのだろうか、それぞれ自分の志を持っているのだろうか、という疑問でした。私が見るところ、それらが非常に希薄なのです。やはりこうなったのは、偏差値教育で育ったことが大きいと思います。あなたの偏差値だとこの大学なら受かりますよ、と言われ、それを基準に大学や学部を選んで入学してくる学生ばかりになった。

佐藤 偏差値に振り回されているわけです。

松岡 確か佐藤さんが大学に入学した年から、共通一次試験がスタートしたのですよね。

佐藤 ええ、1979年です。

松岡 それから10年後に平成になったわけですが、その10年間は共通一次試験によって何が起きているのか、まだ判然としていなかったと思います。それが平成に入って、偏差値教育の弊害が大きく浮き彫りになってきた。

佐藤 数多くの中高一貫校ができて、その中には特進クラス、スーパー特進クラスが設置されました。それらは他のクラスとは交流がなく、部活も事実上禁止。午後3時に授業が終わると、予備校と連携して毎日夜9時まで補習をやり、連日試験をやっては順位を壁に貼り出す。そんな学校からは、学生が勉強嫌いになって入学してきます。

松岡 そうですね。もう新しい何かに挑戦しようという力が残っていない。

佐藤 偏差値には、受験戦争を煽り立て、上へ上へと向かわせる「加熱」という機能がありますが、この偏差値だとこの学校は無理だからやめろ、と言って諦めさせる「冷却」という面もある。今の子供たちはこれを繰り返しています。そんな話をしたら、松岡学長は「熱して冷やして、焼きを入れると、確かによく切れるようになるけれども脆くなる。人間も金属も同じだな」とおっしゃった。そのお話は、いろいろなところで紹介させてもらっています。

松岡 問題は他にもあります。それは、教師に、人を育てていきたいという気持ちがどんどん少なくなっていることです。進学のために中高一貫校が次々とできて、その中で進学クラスを分けてしまうのは、教育という観点からすれば異常なことですよ。そうした教育者側の問題もあって、悪循環に陥っている。

佐藤 大学の先生だって、そこが終着点だと思ってしまう人がいますからね。母校の先生になったところで、もう教育も研究も一所懸命にはやらない。そうすると学生も意欲をなくす。

松岡 だから次の時代を支える人たちが本当に大学から生まれてくるのか、すごく不安を感じます。大学は、次代を担う人材を育てるため何をすべきか、真剣に考える時期に来ているのだと思います。

「新島塾」と「教育寮」

佐藤 ちょうど今、受験シーズンですが、文科省が導入しようとした新テストが頓挫しまし

たね。

松岡 文科省が目指すところはわかりますが、これからの1年であの大きな仕組みを練り直せるのか、不安はありますね。

佐藤 私はもう、練り直すのではなく、先送りして、結局、国公立大学は2次試験で対応する形で落ち着くんじゃないかと思っています。でもそうすると国公立大学間の差がぐんと開いてしまう。2次試験の作問がちゃんとできる東京大学や京都大学などと、作問できない大学の差がどんどん広がる。問題が作れなければ、学生をちゃんと見極められませんから。

松岡 そこはやはり記述式になるわけで、私も記述式はとても重要だと思っています。数学の採点にずっと関わってきましたが、記述式は論理的な思考を全て見ることができます。なぜその答えに到達したかがわかる。そしてもう一つ、思わぬ解き方にも出会います。解は一つでも解き方は一つではない。それも見ることができるのが記述式です。だから記述式は、その大学でその学生がきちんと学んでいける学力の保証になります。

佐藤 どこから教育すればいいのか、はっきりしますからね。

松岡 だから私たちも作問、採点には長い時間をかけて、丁寧に見ています。

佐藤 作問力は、同志社大学など難関私立大学には死活的に重要です。現状では京都大学と同志社に受かったら、100%京大に行きますよね。そうすると京大のすべり止めになるリスクがある。京大を落ちた学生ばかりだったら、大学は沈滞した雰囲気になります。だから京大に合格しても同志社には落ちる学生をどのくらい作れるかが重要になってくる。同志社用の勉強を一定期間はやらないと受からないようにしなくてはならないわけです。そうすると第1志望で入ってくる学生が増えてきます。それは早稲田も慶応も同じです。だから作問に癖がある。

松岡 一方で、大学としては、不本意ながら入学してきた学生にも、自己再生する能力を身に付けていってもらいたい。それはこれから社会に出て生き抜いていく上にも必要です。私たちはまずそのチャンスを作ってあげたい。

佐藤 こうした問題を解決するために、いくつもの画期的な制度を作ったわけですね。

松岡 同志社は2025年に創立150周年を迎えます。そこを目標に「同志社大学ビジョン2025」を打ち立てました。大学が本来あるべき姿を見せていきたい。

佐藤 その一つが「リーダー養成」ですね。

松岡 これまでの偏差値教育の中で、自分自身をしっかり伸ばしていく機会を得られなかった学生たちをちゃんと引き上げていくには、柔軟な学びの場を作っていくことが必要です。その一つとして創業者・新島襄（じょう）の名前を冠した「新島塾」を作りました。これには佐藤さんにも大きく関わっていただいた。

佐藤 全学の学生から最大 25 名を選抜して、期間は 2 年次から 2 年間。毎年秋には 3 泊 4 日の合宿もある。こうしたリーダー養成のプログラムは総合大学として初めての試みでしょう。

松岡 昨年の第 1 回は、8 学部から 17 名になりました。合宿は 9 月 7 日から 10 日までで、「2040 年頃の時代でも通用する普遍的な学力は何かを知り、それをいかに獲得すればいいか」がテーマでした。

佐藤 私はそこでユヴァル・ノア・ハラリの『ホモ・デウス』をテキストに講義をしました。

松岡 合宿の前半 2 日間だけご一緒させていただきましたが、学生たちを見ていて、こうした場をどんどん提供していかないといけないと強く思いましたね。講義だけでなく、夕食を一緒に摂ったり、寝る前にちょっと懇親の場を持ったり、そこからも彼らはいろいろなことを吸収していきますね。

佐藤 学生の意識はかなり高いですよ。私は外務省でロシア語の研修指導官だったことがあります。1 人当たり 3 千万円ほどお金をかける。それでも本省の 1 年半と在外勤務の 2 年を経て、満足のいくレベルに仕上がるのは約 2 割です。だいたい組織で人を絞っていくと 2 割くらいになるのですが、それに比べると格段にいい感じです。

松岡 手を挙げたからといって、すぐ入れるわけではないですからね。

佐藤 成績や要領がいい学生だけを集めてもよくないし、教授推薦で可愛がられている学生だけでも面白くない。その辺はファジー（曖昧）にしているんですよね。

松岡 ええ。

佐藤 私はこれから始まる「教育寮」もすごく可能性があると思うんです。

松岡 ようやく 2021 年の 9 月に完成します。

佐藤 これは経済的支援が必要な学生を入れる経済寮ではなくて、教育のための寮ですよ
ね。

松岡 そうです。学生同士が議論し、刺激を与え合いながら、共に学び共に生活する。生活そのものが学ぶ場である、という考え方がいまの世の中からは消えつつあります。それを復興させていきたい。

佐藤 それはいいですね。

松岡 同志社にはかつて新島襄が留学した大学の名前の付いた「アーモスト館」という寮
がありました。その伝統を後世に伝えていく意味もあります。

佐藤 神学部にも、壮図（そうと）寮や此春（ししゅん）寮といった寮がありましたね。
それらも元は教育寮だったと言っていい。戦前は、神学部でキリスト教を学ぶ学生はほとん
ど親から勘当されていました。だから、生活を含めた全体の面倒を学校が見る必要がありま
した。

松岡 そうですね。

佐藤 教育寮はどのくらいの規模になるのですか。

松岡 定員は 180 名です。彼らはここで 2 年間で過ごします。また留学生も入ってもらい
ます。

佐藤 志願制なんですか。

松岡 選考方法はまだ検討中で、入りたいと言ってすぐ入れるようになるかはわかりませ
ん。競争率は高くなるかもしれない。

佐藤 入寮したら学生たちにはアウトプットも求めて、論文を書かせるなど、ビシビシ厳
しめにやったほうがいいと思いますよ（笑）。

松岡 2年間で何をするかはこれからの課題です。基本は1年と2年が交じるような形にしたいと思っています。

佐藤 やっぱり鉄は熱いうちに打てで、1、2年生のうちに体験させたほうがいい。学生たちは、みんなでツルむのは、何でも楽しいんですよ。麻雀でもテニスでも、街をフラつくことだって楽しい。それが勉強である人たちもいて、そういう集団をいくつ作れるかが大事だと思います。同志社にはラーニング・コモンズ（学びの共有空間）がありますね。そこには勉強するのが楽しいというグループが集まっている。彼らは伸びていくな、と思いますね。

EU キャンパスで学ぶ

佐藤 この教育寮とともに大きな可能性を秘めていると思うのは、同志社の EU キャンパスです。

松岡 2017年にドイツのテュービンゲン大学の中に同志社のキャンパスを設けました。昨年の4月からは学生が向こうで講義を受け、単位も取っています。今年は、春と秋両方にプログラムを置いて、職員も派遣します。そこで異文化に触れて、現地の生活から何かを感じ取り、自身を成長させて戻ってきてほしい。

佐藤 ドイツというのがポイントです。日本と同じ第2次大戦の敗戦国ですから、ドイツ語は国連公用語ではない。だからドイツの学生は英語を学ばなくてはなりません。立場としては日本人と同じで、学んだ彼らの英語はわかりやすい。それに基本的にドイツは高等教育が無料です。

松岡 そうですね。

佐藤 さらに言えば、EUには「エラスムス・プログラム」という各国共通の共同教育プログラムがあって、大学生は国境を越えて各地の大学で授業を受けることができます。言葉は基本的に英語です。そうすると、例えば私が教える神学部では3年で全て単位を取ることができますから、1年間丸々EUキャンパスに行って、ヨーロッパ中の講義を受けることもできる。

松岡 「グローバル人材の育成」も大きな柱です。2025年に向けて学生全体の30%を留学生として送り出し、また13%を外国からの留学生にしようという目標があります。大学のカリキュラムが詰まりすぎていると外国に行けないので、どこかでゆとりを作っておく

ることが必要になってくる。春の時間をもう少し使いやすくするとか、学年暦の改革を進めるとか。

佐藤 それは大学院改革にもつながる話ですね。ともかく今は学生が腰を落ち着けて勉強する時間が少なすぎる。

松岡 ええ。学部生を4年という時間軸で教育するのはあまりに短い。特に就職活動で、学ぶべき時間がどんどん消えてしまう。

佐藤 3年から就職活動して、それが終わったらもう勉強に打ち込むことはありませんから、学部では専門的な勉強は1年半くらいしかできませんよ。

松岡 自分が将来何をやるべきなのか、しっかりと見極めながら勉強していくには、学部3年、大学院3年制にして6年間、あるいはドクターまでいく9年間という時間軸が必要ではないかと思っています。ここを変えていくのも私の改革の一つの柱です。

佐藤 修士課程までやれば、実質4年半は専門的な勉強時間が確保できます。1年半から勉強時間が3倍になれば、アウトプットでは5、6倍の差が出てきますよ。

松岡 そうしたゆとりの中で、EU キャンパスに留学する時間も生まれるのではないかと思います。

文理融合の重要性

佐藤 同志社はキリスト教主義ですが、ミッションスクールとは言いません。ミッションというのは、外国の宣教師たちが日本でキリスト教を布教して信者を作り、その先に植民地化も視野に入れた活動です。新島襄はそういう学校を作ったのではない。では同志社のキリスト教主義的な教育が何かといえば、それは一種の価値観教育だと思います。そこには国際主義も入ってくる。

松岡 別の言い方をすると、キリスト教主義に立脚したりベラルアーツ教育だと思います。これまで佐藤さんと何度も話してきた「総合知」ですね。「統合知」と言ってもいい。そこに根差した教育を目指しています。その一つのアプローチが、文理融合の教養を身につけた「サイエンス・コミュニケーターの養成」で、これは佐藤さんに授業していただいている。

佐藤 サイエンス・コミュニケーターの養成は、松岡さんが導入された「ALL DOSHISHA 教育推進プログラム」の一つでした。

松岡 2018年からはじめた制度です。各学部から教育プログラムを募り、全学的なコンペで評価を下し、採用されたプログラムは全学で行います。サイエンス・コミュニケーターは最初の年に採用されたもので、これは総合知に欠かせない、まさに文理融合の教育です。

佐藤 19世紀の初めにドイツで、当時はプロシアですが、大学改革の動きがありました。フランスが戦争に強いのは、総合大学から神学部や哲学部をなくして工学部系統、法学部系統の単科大学を中心にしたためだということで、つまりドイツにもフランス型のポリテクニク専門学校を導入しようとしていました。この時、反対したのがベルリン大学神学部のシュライエルマッハーです。それは中世の職人学校に逆戻りすることだとして、逆に各分野の研究者が哲学部で講座を持ち、自身の研究をわかりやすく伝える仕組みを作った。これによってドイツの基礎的学力は高まり、19世紀はドイツの時代になるんです。

松岡 まさに文理融合、サイエンス・コミュニケーターの重要性に通じる話です。

佐藤 ただ大学の先生でもそれを理解していない人が多い。昨年、日本分子生物学会の特別講演で、文理融合の話をしました。すると何人もの先生が手を挙げて、「文理融合と言っても、両方わかって説明できる先生はいるんですか」と言う。

松岡 それはまったく次元の違う話です。

佐藤 自分が何を研究しているのか、他の人たちにわかるように話す、理科系の先生なら、自分の研究を文科系の人にわかるように説明できなければならない。

松岡 その通りです。

佐藤 去年、私はその講義で「錬金術」を取り上げました。なぜ錬金術なのか。これがわかれば、STAP細胞の小保方晴子騒動のことがわかるからです。心理学者カール・ユングは『心理学と錬金術』という本を書いています。彼は、錬金術は一般に考えられているような卑金属を貴金属に変えるものではなく、錬金術師が研究室にいるメンバーの深層心理を支配した時に完成する心理技法だと説明するんですね。

松岡 なるほど。

佐藤 錬金術と心理学を援用すると、なぜあの騒動が起きたかがわかる。自然科学を勉強する人は、錬金術を知っておくと、基礎的なところからチェックできるようになります。国も、危ない研究にお金をつけてはいけないわけで、そういうところにも彼らが必要になってきます。

松岡 AI や IoT など新たなキーワードが現れ、それらの仕組みを理解している人とそうでない人に世の中が分断されていく可能性もありますね。専門化して複雑になった学問や研究をいかに部外の人に理解させていくか、またそれを担う人材を育てていくことは非常に大切で、まさに今、大学が取り組まなければならないことだと思っています。

松岡敬（まつおかたかし） 同志社大学学長

1955 年生まれ。同志社大学工学部機械工学科卒。84 年同大学院工学研究科機械工学専攻博士課程（後期課程）単位取得退学。87 年工学博士（同志社大学）。87 年近畿大学工学部専任講師、91 年助教授を経て、93 年同志社大学工学部助教授。英サリー大学に留学後の 98 年より工学部教授。2016 年 4 月、同大第 33 代学長に就任した。

「週刊新潮」2020 年 2 月 13 日号 掲載